

# 私の戦争体験の一つ

——きのこ雲の原型を見た——

田中純子

東中野二丁目

太平洋戦争開戦時は、国民学校（小学校）の六年生で、終戦時は旧制高等女学校の四年生だった。現在の中学生から高校生に当たる年代に、戦争の真只中に身を置き戦後の混乱期を生きたことになる。

当時の体験は書き始めると、とどまるところを知らず、とても十枚程度には、まとめられない。以下は、その中のほんの一端である。

旧制高女一年生の二学期から、英語は敵国語だということで授業から消えた。

二年生になると、近くの農家への勤労奉仕が多くなり、授業も少なくなっていく。働き盛りの夫や息子を戦争にとられ、人手不足になっていた農家への農作業の手伝いである。

サイパンが玉砕したのが三年生の夏。夏休みは返上して、毎日学校へ通って軍服を縫った。

そして、二学期になったら、近くの海軍航空廠へ勤労働員さ

れた。私の住んでいた大村市は、もともと農漁村だったが、陸軍の部隊があり、海軍航空隊、海軍航空廠のある軍都として戦時中は人口六万人ほどにふくれ上がった地方都市であった。学校ではなく、工場へ毎日出勤した。

工場での一日は、朝礼のあと、八時から作業開始。十時に五分、昼食時に三〇分、三時に一〇分の休憩時間以外はフル回転で働いた。土曜も日曜もない「月月火水木金金」である。定時は五時だがほとんど七時まで残業した。仕事の内容は、当時の最新鋭の戦闘機「紫電改」の部品を作ることであった。もちろんどこに使われるのかはわからないまま、厚い鉄板に穴をあけて切ったり、ヤスリかけ、火花の散るグラインダーで金属面をなめらかに削ったり、パイプに砂をつめて熱して曲げたり……と、ちょっと気を抜くと怪我するような仕事だった。

昭和十九年十月二五日の大空襲で工場が壊滅してからは、山あいの疎開工場で仕事をしていた。小さな空襲は、しよつ中で、その都度横穴防空壕に避難したが、もう馴れっこになって恐怖

心もなくなり、壕内ではみんな疲れ果ててグーグー眠りこけて、いつしかそれが唯一の骨休めになっていた。

そんな夏の日、昭和二〇年八月九日は晴れていた。

私は、たまたまその時、弁当当番で屋外にいた。数人で食堂から昼食用の弁当を運んでいた。十一時ごろ、突然、ピカッと光った。とてつもない大きな鏡で誰かがいたはずらでもしたような、また大きな稲妻のようでもあった。こんなに晴れているのに、はてな?と思いつながら工場内に入った。途端、ドーンと、今まで一度も聞いたこともないような大きな音がした。空襲時の爆発音とも違う、大きな音だった。

みんなシーンと静まりかえった。しばらくして外を見た。ガスタンクの上に白い煙とも雲ともつかないものがモクモクと盛り上がり上がった。誰かが、「あつ、大きな南瓜だ!」と言った。つづいて「ほんと、南瓜みたいな雲だ!」「ガスタンクに直撃弾が落ちて爆発したんだ!」と口々に言っていたが、南瓜型の雲とも煙ともつかないのがみるみるうちに大きくなって上に上がり、その下に細い雲(煙)がつかった。後年、きのこ雲といわれる原爆雲が形づくられていったのだが、そこまでは見とけなかった。

すぐに空襲警報が発令され、みんな工場近くに掘られた横穴防空壕へ避難した。異様な光と音と雲を見た直後で、今後何が起こるか不安な気持ちで壕内にいた。警報が解除になり、外へ

出た時は五時を過ぎていた。いつもならまた職場に戻って仕事ということになるのだが、さすがにその日は私たち学徒は帰ってよいことになった。

空は一面、雲におおわれて地味な夕焼け色に染まっていた。ほんとうにそれが晴れ後曇りの雲なのだか、煙なのか、私にはわからない。ガスタンクの上はこのほか赤かった。その方向四〇キロほど先に長崎市があった。

六日に広島市に落ちた新型爆弾と同じものが長崎市に落ちたらしい、という情報が入り、「広島では大勢死んでウジ虫がわいている」などと誰かが話していた。

帰途は、いつものように軍歌を歌いながら足並揃えて、というわけにはいかず、みんな沈んだ気持ちでそれぞれ家路へ急いだ。

家へ帰ったら、専ら今日の、かつて見たことも聞いたこともない、異様な光と音の恐怖の話はもちきりだった。

やがて夜になり、空襲警報が出っぱなしだったかどうかは記憶にないが、その夜は布団に入る気がしなくて家中の者みんな外へ出て、いつでも防空壕に入れる態勢で過ごした。

長崎市の方向は真っ赤に燃えていた。昼間より鮮明で、まるで地獄を見ているような恐怖におののいた。

悪いことは重なるもので、ソ連が参戦したことをラジオで知ったのもその夜であった。

私はそのとき十五歳だったが、はじめて、子供心にも「日本はこの先どうなるのか」「私たち日本人はどうなるのか」と不安に思った。

「日本は必ず勝つ」と教えこまれ、「必ず神風が吹く」と信じてきたのだったが、この恐い爆弾とソ連の参戦には神風が吹いても何の役にも立つまいと思った。そして、いざというときのための竹槍訓練の滑稽さに気がついた。

恐怖の一夜が明けて工場へ行った。

駅（現在のJR大村駅）の前を通ってきた友人たちは、その惨状を伝えた。駅前広場は死体でいっぱい、手足がちぎれていたり、焼けただれていたり、そのむごたらしいことって、まさにこの世の地獄だと…。

大村市には海軍病院があり、傷ついた人たちが汽車で運ばれたが、途中で息絶えて放置されていたのであった。

その日から終戦までの数日は、生きた心地がしなかった。一日の工場勤務を終えてわが家に帰ると、「ああ、今日もわが家があった。みんな生きてた！」と、ほっとした。父と弟は学校へ、母と姉は朝から弁当を持って横穴防空壕に避難したという。近所の人同士でみんなそうしていた。次に落とされるのは大村市だというデマもあり、新型爆弾は横穴防空壕に入っていれば安全だといわれていたので、終戦まで山に掘られた壕に通っていた。

それから、これまでは空襲にそなえて白い衣服は目立つので、黒っぽいものを着たほうが安全だといわれていたのが逆になった。黒い衣服は新型爆弾の光を吸収するので火傷になりやすいが、白い服だと光を反射してくれるので安全だ、そして半袖よりも長袖を着るようにすすめられた。

八月十五日、その日は旧盆で珍しくも工場はお休みの日であった。お昼近くになって、正午に重大放送があるという。

いよいよ玉砕のときがきたのか、ますます奮起して頑張れ！と発破をかけられるのかと覚悟してラジオの前に座った。雑音ばかりでよく聞きとれなかった。途中で父が「戦争は終わったらしい」と言ったが、そういえばそうのようで、天皇の「…堪え難きを堪え、忍び難きを忍び…」のあたりが印象強く思われた。

放送が終って「戦争は終わった！無条件降伏だ！」ということがはつきりしても、まだ信じられなかった。なぜなら「かつて日本は戦争に敗けたことがない。敗けることは恥なので、もし敗けるようなことがあっても、その前に一億玉砕の覚悟で頑張れ！」というような考え方をたたき込まれていたからである。何だか拍子抜けの感じだった。でも、その反面、ほんとにホッとした。もう地獄の底を見せつけられるような恐い爆弾に怯えることもないのだ、命が助かった！という思いで胸がいっぱいになった。

その夜から、久しぶりに燈火管制用の黒い布が取りはらわれた。二〇ワットの電球の、なんと明るかったことか。わが家のまわりは田圃だった。蛙の鳴き声が聞こえた。原爆への恐怖心から耳に入らなかった音である。

